

IR Day 2026 社会インフラ 質疑応答

日 時：2026年 6月1日（月） 14:45～15:20

形 式：NEC本社からオンライン配信

説明者：Corporate EVP 兼 COO、社会インフラ事業担当 永野 博之

Corporate SVP 兼 ネットワークソリューション事業部門長 佐藤 崇

Corporate SVP 兼 海洋システム事業部門長 植松 智則

質問者A

Q：防衛事業の需要が強い中で、NECのキャパシティがどこまで対応できるのか教えてください。2030中計における防衛事業はそこまで強い売上計画ではないように推察されますので計画の前提を教えてください。また、2030中計期間でのキャパシティ拡大によりどの程度の受注拡大に対応できるようになるのでしょうか。増床していく中で大きなコストが先行して発生することはあるのでしょうか。

A：既に増床・増員を進めており、この1～2年でも大きく増床していく予定ですので、この点に問題はありません。また、人も順調に社内で配置移動をしつつ、キャリア採用も行っており、新たな需要に対応できるところまでは手を打っています。公表されている中央契約分は現在3,000億円規模ですが、4,000億円規模を目標としてキャパシティを拡大しています。

コスト面については、効率化・DX化を更に進めることでコストを下げたいと考えています。売上拡大に伴うコスト増はありますが、利益増の範囲の中で効率的に行っていきます。

Q：海洋事業のシェア目標35%は、国のサポートもあり追い風になっているものの、達成するためには自社で敷設船を保有しないと難しいのではないかと思います。敷設船の保有の考え方と、先行してコストが発生する可能性について教えてください。業界全体で敷設船が枯渇していく中で、NECとして確保できる状況なののでしょうか。

A：シェア35%を目指すにあたって必要なアセットは、工場の生産能力と敷設能力です。競合他社は保守船も含め7～8隻持っています。今後5年間で自社保有とチャーターを合わせて最大で5隻程度が必要だと想定しています。自社で敷設船を持つ意義は、NECの管理下で敷設工事をしたいという思いがあり、船を持つことで工事のナレッジの蓄積も可能になりますし、収益性の確保も狙っています。

業界全体では敷設船は枯渇する見通しです。2033年頃には多くの船が老朽化するので、船自体の市場価値も上がる見込みです。その中で市場シェア35%は十分に目指せる範囲だと考えています。市場規模は現状3,000億円が今後5～6年間で年間5,000億円まで伸びるという試算を行っています。しかし、市場の伸びは不安定でボラティリティの高いものですので、最大5隻と申し上げましたが、市場の伸び具合を見極めながら都度判断することになるかと思います。

質問者B

Q：日本政府の防衛費におけるGDP比が引き上げとなった場合の見方について教えてください。また、宇宙事業におけるアップサイドについてもご教示ください。

A：防衛は、計画の前提として現在のGDP比2%で考えておりますが、3.5%への増額という話もありますので常にその可能性があることを考慮し、人員計画や場所の確保をどうするのかを考えています。そのため1年後に3.5%となった場合でも即座に対応できるようにシミュレーションを行っています。正直なところ防衛費が増額となった場合に事業規模がどの程度になるかは分かりません。防衛予算の内容次第になります。また、海外とアライアンスを組む可能性もあり、我々が商社的な役割をすることも考えられます。最大では倍増となる可能性も含めあらゆるパターンを検討しています。

宇宙の光通信に関しましては、我々の想定通りに政府も含めた協力が得られれば、次期中期計画に入っていると思っています。2032年度から大きなサービスが始まると想定しており、それまでに投資をし、資金も確保していき、大きく業績に貢献することを期待しています。それまでは、実証実験などを行いながら政府機関からの資金も得て、基盤を上げていきます。

Q：サイバーセキュリティのサービス展開に関して、現在どの程度の需要ができているのか、また今後の見通しについてご教示いただけますでしょうか。

A：サイバーセキュリティのサービスは既に展開しています。まず政府を第一優先とし、次にACD法に伴いまず基幹インフラ事業者257者とどのように進めていくか、その後は257者以外の大企業やグローバル展開している企業と、そして中小企業との進め方を検討しています。現在、グローバル展開する企業を支援するための準備を進めており、2027年4月からは全てを実行できるよう現在準備しています。

質問者C

Q：国内の装備品としてAIを採用した場合、NECの事業機会は広がるのでしょうか。

A：多くの現場ではまだAIをどこまで積極的に使っていいのか決断されていません。NECは仮想的に、実際にAIを活用したらどうなるかの実証に取り組んでおり、政府がAIを積極的に使ってよいと判断した場合に、即座に対応できるような体制をとっています。また、通信分野などでは開発に積極的にAIを使用していますし、活用した情報を防衛分野にも共有してもらい、世の中よりも先行してAIに取り組んでいきたいと考えています。AI活用は確実に広がると思いますが、AI開発をした時に外部に情報が漏れないかどうか、防衛産業の各企業にとって最大の懸念ですので、問題が起こらないようなAIの使い方を中央研究所と検討しています。それが可能となれば防衛産業でも安心してAIを使えますし、防衛省でも使えるようになると思います。

Q：通信事業は一時期減益を許容して成長に踏み込むのか、それとも緩やかに事業開拓を進めていくのかといった利益面でのリスクの取り方を教えてください。

A：まず、無理に攻めなくても2030中計の期間での売上はほぼ変わらずに利益率が向上すると確信しています。その上で、ハードウェア事業からソフトウェア事業にシフト、つまり利益率が高い領域に注力していき、売上はそれほど大きな成長ではないものの、利益を大きく成長させる計画となっています。攻めの部分では、vRANやモバイルコアな

どのソフトウェアとAIは非常に親和性が高いため新しい価値を創出していきます。

質問者D

Q：資料にあるオーストラリアとの契約は当初3隻とのことですが、全体では11隻規模だと認識しています。残り8隻は国内で建造するのでしょうか。仮に海外で建造する場合、NECの事業にどのような影響があるのでしょうか。海外にNECのものを持っていくのでしょうか。

A：現在、防衛省から聞いている範囲では、3隻は技術移転の観点から国内で建造するという事です。それ以降については未定ですが、最終的にはオーストラリアの港で建造することになると思います。その際、NECがどのような形で関わるかは未定です。

質問者E

Q：テレコム事業はこれから利益率を上げながら攻めに転じるということですが、地域別・キャリア別の戦略についてご説明ください。

A：国内については、これまでの実績を最大限に活かして事業を広げていきます。海外については、OREX SAIというJVを通じて展開するとともに、国内で培った技術・ノウハウをグローバルなベンダーや国に提供するノウハウビジネスも始めています。特にノウハウビジネスは利益率が高く、対象となる国や顧客を広げられれば利益貢献が可能です。特定の顧客についての詳細は申し上げられませんが、ノウハウ事業はキャリア向けではなく、我々と同じようなベンダー向けで、国産の製品を展開する国・企業に対して既に開始しています。これが増えていくことで、NECの事業も拡大可能です。現在幾つかの提案活動を進めているところです。

Q：防衛事業ではAIを含め投資も必要だと思います。大きな投資が必要になるような展開や、アライアンスを組む必要性もあるのでしょうか。ICT以外の領域の展開が広がる場合には、NEC自身が変わっていかねばならないところもあるのでしょうか。

A：既にヨーロッパとアメリカでベンチャーキャピタル2社と協業しています。これらは宇宙・防衛を中心とした領域です。また、防衛以外でAIと結びつきそうな領域を積極的に探しており、将来的に防衛や宇宙において様々な形で活用できる可能性への投資を考えています。また、フィジカルAIへの取り組みとして、今現在は防衛と直接は関係ないものの、近い領域でのアライアンスや買収、もしくは最終的にNECが作っていくという判断をしていきたいと考えています。

質問者F

Q：ANSの売上成長の計画4～6%という数字は、保守的あるいはチャレンジングなのでしょうか。海洋は森田社長が中長期で売上1,500億円を見ているとコメントしていましたので、航空宇宙・防衛が一桁前半の成長となります。先ほどの中央調達4,000億円に拡大する可能性があるという話や海外展開を考えると、余裕があるように見えます。

A：現在の防衛力装備計画の中で年間3,000億円を達成することはかなりハイレベルであったと思っています。次の計画が出てこないとわかりませんが、今回と同じGDP比2%であったとして、その内の1～2割を防衛以外の経済安全保障系の領域に使うという話も出ています。その中で同じように3,000億円をキープすることは相当難しいですが、キープあるいは4,000億円を目指すにはどうすればいいかということも2年前から検討しています。もし、1～2割が他の経済安全保障領域に使われるのであれば、海底ケーブルや、通信、サイバーセキュリティなどで案件獲得を目指していくこととなります。なお、海外分は2030中計には含まれておらずプラスアルファとなります。

以上